

崇貞学園史断章

——年表作成作業のなかから

太田 哲男

はじめに

桜美林学園の前身である「崇貞学校」（のちに「崇貞学園」）は、1921年5月28日の設立とされたので、2021年5月はその100周年に当たる。そこで、崇貞学園・桜美林学園100年史が制作されることとなり、まずはそのうちの「図録編」の編集作業が行われている。

創設者清水安三には、『朝陽門外^(注1)』をはじめとする「自伝」が残されているけれども、学校史という観点から、年代の特定できる確実な情報を「自伝」に求めるとなると、ごく限定的である。学園紙『支那之友』が刊行された1930年代後半はさて置き、それ以前、ことに1920年代の学校内部の状況をうかがい得る史料は非常に乏しい。しかし、「崇貞学校報告」（1922年）があるので、それを重視しながら、他の史料と照合しつつ検討してみたい。

私は、上記「図録編」の戦前部分の創立者たちと学校の「図録」及び「年表」編集担当者のひとりとなり、2020年春からその作業にとり組んだが、あいにくのコロナ禍で、資料の入手に制約が生じている。しかし、それなりの資料を得て、「学校史」に関してこれまであまり知られていなかった事項を明確にできたところがあると感じている。

第一に、その学校史年表についていえば、これまで不明だった点を少なからず解明し、また、誤り伝えられてきたことを訂正することができたところがある。年代の確定にともなって明瞭になったこともある。そういう点を、ここに摘記しておきたい。さらにいえば、明瞭になった点をふまえて『朝陽門外』を読み直せば、新たな光を与えることのできる点もありそうである。

ただし、年表といっても、図録編所収年表は簡略なものとなり、詳しい年表はその後の「通史編」あるいは「資料編」に掲載される予定と聞いているが、いずれにせよ、その詳しい年表にも、掲載事項の確定のプロセスまで掲載されるばあいは限られるであろう。そこで、この一文では、そのあたりにもふれたい。

第二に、その図録編についていえば、当然ながら写真資料が多くを占める。だが、崇貞学園時代の写真は、年代を確定するのがなかなか困難であって、私もその確定をこころみはしたものの、年代が明らかになった写真はじつのところあまり多くない。しかし、その確定作業のプロセスについて述べておくことは、「資料編」「通史編」作成の、さらには今後の学園史研究の参考になることもあろうかと考えた。それがこの一文を草しておくこととした理由の一端である。

学校史年表作成の際、基礎資料として重視したのは、まずは次の資料である。最初の2点は、アジア歴史資料センター〔以下、アジ歴と略称〕資料に含まれる。

【1】崇貞学校報告 大正十一年九月^(注2)

【2】崇貞女学校概要^(注3)〔アジ歴資料「昭和七年十一月崇貞女学校助成金交付ニ関スル件」所収。タイプ打ちの「概要」と印刷物の「概要」の2種類を含む〕

1930年代前半までの崇貞学校の「学校報告」「概要」の類いのアジ歴資料は、これら以外には見当たらないようである。この「報告」や「概要」は、毎年作成されていたのかもしれないが、アジ歴資料に残存しているのは外務省に提出された補助金申請に関連する文書であり、この2点は、インターネット上でアクセス可能である。

この他の基礎資料に、次のものがある。

【3】崇貞女学校概要〔1935年末頃の印刷と推定。学内にコピーが残存〕

【4】崇貞学園一覧〔1936年10月発行〕^(注4)

第一章

まず、【1】の「崇貞学校報告」から検討していこう（以下、大正十一年=1922年9月の文書を単に「崇貞学校報告」と略記）。この資料で注目したい箇所を引用しておこう。

〔1-1〕資料冒頭

「支那人教育 崇貞学校報告 大正十一年九月 北京東総布胡同十七号 清水安三」とあり、また、「生徒数 七十五名／経費 月、約百円／経営 日本人」とある。

この「生徒数七十五名」「経費、月、約百円」については、次項以降でまたふれる。

〔1-2〕事務報告 「学校を建立」

冒頭に、「私は今より六年前、日本組合教会から留学を命ぜられて、支那に参つたのであります。」とあり、清水の中国行きが「留学」と位置づけられている点が興味深い、それはともかく、「昨年」つまり1921年に、「北支旱災飢餓救援の為に、日華実業協会の事業に参加するを得まして…」とある点にも注目したい。清水は、洪沢栄一が会長を務めた「日華実業協会」の活動に参加するという形で救援活動に従事したのである。

そして、次のように続く。

◎その飢饉救済の経験に依つて、この崇貞学校を建立することになりました。恰も当時北京北支旱災救済会委員であつた中山龍次氏の斡旋で、帝国教育界義捐、綿衣製作費の剰余金五百八拾弍元七拾九仙を学校建設費として頂くことが能きました。〔中略〕続いて日華実業協会工藤鉄男氏の斡旋で、会長洪沢栄一氏の名に依て、弍百元の寄附を受け、漸く基礎を堅むるに至つたのであります。〔傍点は引用者。以下同じ〕

◎お金があつても、生徒が無ければと、安〔案〕じ乍ら創立の事務を運びました。然るに、北京朝陽門外は貧民不就業児童の多きところとて、忽ちにして、八十余名の入学希望者がありました。恰巧そうて、音無しそうな子供を五十名選んで、入学させ、二女教員を聘して、開校することに致しました。大正十年五月二十八日、小さい開校式を開いたのでありますが、思へばその日こそ、我校の永久に記念すべき創立日でありました。〔ルビは引用者。以下同じ〕

ここでは、学校の名称は「崇貞学校」と記されていて、「崇貞学園」あるいは別の名称は登場していない。「崇貞学園」という名称の始まりについては、のちにふれることにしよう。

生徒数についていえば、1921年5月28日の開校のときが50名とここに記されているが、「崇貞学校報告」冒頭には、22年9月、すなわち中国では新学年開始時期に75名とあった。学校の就学期間が1年限りでなかったとすれば、2学年分の生徒数が75名ということになる。

〔1-3〕中山龍次

この記述の部分に、「創立に尽力されし中山龍次氏」というキャプションの付いた中山龍次の肖像写真が掲載されている。だが、この写真とキャプションをみると、私はいささかの違和感を覚える。というのは、この「崇貞学校報告」に掲載されている「寄附者芳名録」に出ている寄附金額との関係で、やや不釣り合いな印象があるからである。この芳名録の一部を摘記すると、次のようである。

金五千円	神戸	田村新吉殿
金五千円	東京	森村豊明会
金壺千五百円	大阪	高木貞衛殿
銀五百八十二弗七十九仙	東京	帝国教育会
銀貳百弗	東京	日華実業協会
銀五拾弗	北京	中山龍次殿
銀貳百五拾弗	北京	清水安三

などである。円とドルが混在しているが、高木の寄附は、土地購入に充てる予定になっていて、「銀壺千參百四拾四弗（金壺千五百円）」と記載されている。すなわち、

1344ドル＝1500円（甲）

ということになる。この比率で計算すれば、中山の寄付金50ドルは、約56円となる。

話が脇に逸れるが、寄付金が円・ドルの混在する形で書かれているので、その点について注記しておく。日華実業協会からの寄付金であるが、このリストには「銀貳百弗」とあり、「崇貞学校報告」から先に引用した文中には「貳百元」とある。誤植ではないとするなら、

200ドル＝200元（乙）

としか読めない。他方、清水『朝陽門外』には、

欧州大戦は、兵卒に銀貨で以て給料を支払ふ必要からか、前にも言つたやうに銀の相場をいやが上にも騰貴せしめたから、一時は日本金百円は支那銀二十七円にしかならなかつた（163ページ）

という記述がある。欧州大戦とはむろん第一次世界大戦（1914-18年）のことであるが、また「一時は」とあって、それがいつまでの事態なのか、ここだけからは判断できないし、私は、歴史上の貨幣単位・相場についての知識があるわけではないけれども、1921年の華北ではという限定付きであるにしても、上記の（甲）（乙）のような比率が存在していたとしておこう。

そこで、崇貞学校への中山の寄附金額に話を戻す。その額が銀五拾弗となれば、帝国教育会の寄附、綿衣製作費の剰余金を合わせたところで、高木貞衛ひとりの寄付金額には及ばないし、いわんや田村や森村豊明会の寄付金額には及ばない。「山高きがゆえに貴からず」だとしても、なぜ、中山の肖像写真だけを掲げて、いわば特筆大書したのか。

学校設立前の寄付金の重要性・意義を重視したからかもしれない。学校設立前に受けとることのできた寄付金がなければ、そもそも設立に至らないわけで、設立前の寄付金、つまり、中山の尽力で得た寄付金の意義が大きかったという位置づけになる。

だが、別の理由も考えられる。それについては、〔1-5〕で述べる。

〔1-4〕「開校」時期はいつか

また、開校の日付が1921年になっていることに、改めて注意をうながしたい。というのは、清水が後年に当時を回想した著作などにおいては、開校を1920年とすることが頻繁に現れるからである。清水の『朝陽門外』（104ページ）も、『北京清譚^{〔註5〕}』も、開校を1920年としている。

しかし、日華実業協会による早災救済運動は1921年6月まで続いたのであり、その活動の延長線上で崇貞学校（『北京清譚』では、「崇貞女子工読学校」）が誕生したとするなら、1920年の開校というのはあり得ない話である。また、1922年9月の「崇貞学校報告」に、開校は1921年5月と記載されており、わずか1年4か月前の話を2年4か月前の話と取り違えるなど、想像するだに至難である^{〔註6〕}。

とはいえ、清水の『支那人の魂を掴む^{〔註7〕}』（1943年）に収録された1920年の「日誌」の記

述では20年5月に学校ができたように書かれているところはふしぎというしかないが、旱災救援活動以前にささやかな「学校」を作っていたのかもしれない。(ちなみに、この「日誌」には救援活動の話がまったく出てこない。)

だが、外務省の補助金の交付ということを考えれば、官立ではない学校であるからには、何らかの「正当化」なしには補助金交付対象にはならないのではなかろうか。そう考えれば、崇貞学校は帝国教育会や渋沢栄一を会長とする日華実業協会などの「後援」を受けた「学校」であると主張できることは、ここにいう「正当化」のためには非常に重要なことだったと考えられ、「崇貞学校報告」では、1921年5月28日創立と宣言されたと考えられる。

そのことの延長線上に、清水の出身母体というべき日本組合基督教会の機関紙『基督教世界』1924年8月14日号の第1面では、「崇貞女学校」の写真と記事が大きく掲載され、そこに「崇貞女学校創立三年記念」と特筆されていたという事態に至る。つまり、組合教会に集まる人びとに、1921年創立を宣言しているのである。1924年が創立三周年だというなら、創立時期を1920年にすることはできない。

この点では、【3】「崇貞女学校概要」では、学校の創立を1921年のこととしていることを注記しておきたい^(注8)。

だが、1920年に始めたささやかな「学校」への清水の思いは断ちがたく、後年になると、1920年創立という物語が前面に出てきたというべきであろう。

〔1-5〕 創立時の崇貞学校はどこにあったか・中山の貢献

さて、創立時の崇貞学校はどこに位置していたのか。このような問いを立てると、即座に「朝陽門外に決まっているだろう」といわれそうであるが、学校は少なくとも二度、移転している。ただ、移転先がいずれも「朝陽門外」ではあるので、崇貞学校の所在地が「朝陽門外」であったことはたしかではある。

開設当時の学校所在地についての清水の回想をみてみよう。

災童収容所の閉鎖をば、麦秋の収穫が、およそ見込みのつく五月末と定めて、私は五月の始めから、早くも朝陽門外の太平倉の設置の行動を起こした。太平倉というのは、災童収容所に借用した禄米倉の北端にあって、朝陽門に最も近接した二階造の建物である。〔中略〕ここに学校を設立することは、まことに聡明なことであろうと考えたのであった。〔中略〕
民国九年（大正九年）五月二十八日、私は朝陽門外の太平倉において、災童収容所の解散式を兼ねて、崇貞女子工読学校の開校式を行った。（『北京清譚』134-135ページ）

民国九年＝大正九年というのは、まだ日華実業協会の救援活動が始まってもない時期であるから、それは大正十年＝1921年の誤りであったとしなければならぬ。くり返しになるが、そのことの「証拠」として、ここに『国民新聞』1920年9月25日付記事の一部を掲げておく^(注9)。この記事〔図a〕の小見出しに、「日華実業協会敢然として起つ」と出ている点に着目いただきたい。したがって、日華実業協会の活動の一環であった「災童収容所」の「解散式」が1920年5月におこなわれたなどというのは、白日夢というべきである。しかし、創設された崇貞学校の所在地は、『北京清譚』の記述が正しいとすれば、朝陽門に最も近接して立つ太平倉にあったとみなければならない^(注10)。

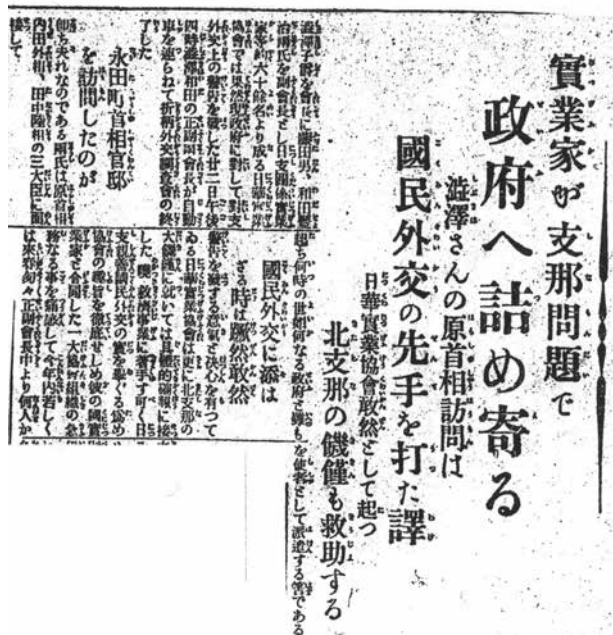
話が少し横道に逸れるが、ここで「崇貞学校報告」で中山龍次の名前が特筆大書されていたという点にもどろう。

この引用で、崇貞学校の所在地が「太平倉」であったとされている。この太平倉は元来中華民国政府の管理下にあったもので、旱災時における救済活動に場所を提供していたという経

緯があった。その一角が崇貞学校の使用するところとなったのだが、こういう経過から考えれば、返却を求める「通告」が北京政府から来るのは当然というものであろう。

とはいえ、学校創設当初、一時的とはいえ、学校の場所の提供を受けたことは幸いだったというべきであろう。では、清水がそういう便宜を得たのはなぜか。表現は適切でないかもしれないが、そこに中山の「口利き」があったのではないか、というのが私の想像である。

中山は、1921年当時「北京北支旱災救済会委員」であり、帝国教育会から崇貞学園への寄付金も、「中山龍次氏の斡旋」によるものだったと「崇貞学校報告」に記されている。それだけではない、中山は「支那交通部顧問」（「崇貞女学校概要」）でもあった。「支那交通部」というのは、中華民国政府の一部であろう。とすれば、太平倉の一角を崇貞学園創立期に校舎として使用できたのは、中山の「尽力」の結果ではなからうか。あくまで私の想像ではあるが、このように考えれば、「崇貞学校報告」に、「創立に尽力されし中山龍次氏」と肖像写真付きで紹介されたのも腑に落ちるといえるべきである^(注11)。



〔図 a〕
『国民新聞』大正9年（1920年）9月25日付。
日華実業協会の救援活動開始が報じられている。

なお、以下の〔2-1〕で「崇貞女学校概要（写真なし版）」（1931年発行）についてふれるが、この「概要」でも、崇貞学校に対する中山の功績がやはり特筆大書されているということを付記しておこう。

今書いたばかりのことを否定するようだが、中山の「口利き」があったかどうかは想像の域を出ない話である。とはいえ、事実としては、災童収容所として使用された建物の一角が「崇貞学校」の誕生の地となったとはいえる。

〔1-6〕1921年の移転先

中山に関する話は以上にとどめ、所在地の件にもどらう。崇貞学校は太平倉において開校した。学校の所在地は、その後どうなったか。この点について、清水は回想する。

ところが、そうは問屋が卸さないもので、「災童収容所が完了したならば、太平倉を返せ」という通告が北京政府から来たではないか。（『北京清譚』136ページ）

この記述は、『朝陽門外』の記述と微妙に異なる。

災童収容所には禄米倉〔太平倉の一角〕を借り受けたが、口ハで〔無料で〕借りること

は面白くない。そこで何とかして家を借りたいと思つた（『朝陽門外』116ページ）
ということで、『朝陽門外』には北京政府からの通告という話は出てこない。だが、いずれにせよ、
学校を太平倉から移さなければならぬという認識が、学校創立後まもなく生じたという点は
共通する。とはいえ、『朝陽門外』も『北京清譚』も、その移転の具体的時期についてはなにも
も書いていない。

時期の問題にふれているのは清水『支那人の魂を掴む』であり、そこには次のように書かれて
いる。

十月三十一日 日曜

兼ねてから、太平倉の返却方を催促されてゐたのであるが、愈々今日、神路街の賈家胡
同に移ることにした。

というのであるが、問題は、この十月三十一日条が、1921年ではなく1920年の「日誌」の抜粋
だという点である。これまでの行論から、これは1921年の話と読むべきと思われるけれども、「日
誌」からの抜粋ということになっているし、加えるに、10月31日が日曜日なのは1920年の場合
であり、21年の10月31日は月曜日なのであるから話はややこしい。

という次第で、この「日誌」を整合的に解説することが至難であるが、『北京清譚』『朝陽門外』
の記述からみて、また、この「日誌」における「太平倉の返却方を催促されて」という記述か
らみて、21年後半に（それが事実として10月31日だったかどうかはともかく）学校の場所を太
平倉からどこかに移したことはたしかであろう。20年ほど前の時期の記憶は曖昧でも、移転し
たという事実の記憶まで曖昧ということは考えにくい。

という次第で、1921年秋（10月末だったかもしれない）に、崇貞学校は移転したと考えるこ
とには無理がないと思われる。移転先は神路街。先に、学校史の基礎資料のひとつとして「崇
貞女学校概要」を挙げたが、その冒頭に「中華民国北平朝陽門外神路街」と書かれている点に
着目したい。つまり、ある時期には、崇貞学校は神路街にあったことは確実である。

その神路街の建物の状況はどんなものだったか。この点について『朝陽門外』では、「化物屋敷」
（116ページ）と書かれている。というのは、この家で6名が殺害され、その「幽霊」が出没す
るために借り手がつかなかったからというのである。安三も美穂も、そのようなことは気にす
ることなく、この屋敷を安価で借りることができた。この屋敷は、「四棟」あって、「三棟あれ
ば三つ教室ができる」と書かれている。

同じ屋敷について『北京清譚』では、微妙に表現が異なっている。「魔鬼房（化物屋敷）」だ
というのだが、そこは、「院子（中庭）が二つもあって、五棟からなっている北房は天上も高
くコンパウンド-ハウスである。奥行も広い家である」（136ページ）と書かれている。

細部の記述はともかく、教室が三つできたというのであれば、小規模の学校ならば運営が可
能だったということである。しかし、これだけのスペースでは、学校の規模を拡大させること
には困難があることもたしかであろう。とはいえ、1924年から26年まで、清水夫妻はアメリカ
に留学していたし、27年秋以降になると、学校への寄附金の減少に直面し、安三が同志社の講
師となって学校の維持費を稼ぐという事態になったから、学校規模の拡大がすぐに進展する
という状況ではなかった。

〔1-7〕ある写真の撮影時期



〔図 b〕
「崇貞学校」の旗のある集合写真

以上のことをふまえて〔図 b〕をみてみよう。この写真はいつ撮影されたものだろうか。右端の立っている男性が安三、左下で帽子をかぶっているのが美穂と思われる。美穂の隣の小さな子どもは学校の生徒ではなく、安三・美穂夫妻の子ども（長男）ではなかろうか。

この想定が妥当だとすると、写真は1923年か1924年のもの（清水夫妻は1924年6月末に終業式を終えて、日本経由でアメリカ留学に向かうので、それ以前）、おそらく1924年初夏の頃と思われる。子どもたちの服装からみて、寒冷期とは思えない。

その他の考慮要因の第一は、生徒（児童）数である。数えると60名弱、学校が神路街にあった時代の写真であろう。その第二は、教員である。前から2列目中ほどに大人の女性が2人もしくは3人写っている。〔1-2〕での「崇貞学校報告」からの引用に、創立時の教員として女子教員が2名いたことが書かれていたが、その数とほぼ合致する。左端に成人男性の姿がみえるが、学校の支援者かもしれない（中山龍次という可能性もある。時代がずれるが、1927年から33年まで、清水は活動の中心を京都に移す。その間に、北京にいた「伊東豊作、矢野春隆両氏^{〔注12〕}の援助を乞ひ漸く学校を継続することを得た」と1936年の『崇貞学園一覽』に出ている、その伊東と矢野かもしれない）。

この推定が妥当だとして、この写真にはなお注目すべき点がある。それは、背景に「崇貞学校」と書かれ、正三角形3つを組み合わせたロゴが描かれた旗が掲げられている点である。学校名が「崇貞学園」ではなく「崇貞学校」となっているのである。また、このロゴは、同志社のものとほぼ同じであって、清水が同志社を強く念頭に置いていたものと考えられよう。

今ひとつ注目すべきは、背景になっている建物である。特に決め手はないのだが、これが「崇貞学校」の建物の一角であると考えるのが自然であろう。とすれば、この建物は、『朝陽門外』で「化物屋敷」と書かれていたその建物の一部ではなかろうか。

のちに、「崇貞女学校概要」について検討するが、そこに出ている建物の写真、たとえば〔図 e〕や〔図 f〕の校舎は、ここに掲げた〔図 b〕とあまりにも異なった雰囲気をたたえているように思われる。

1924年において学内を写した写真はもう1枚ある。それは、『基督教世界』（1924年8月14日号）の第1面に、「崇貞女学校」という見出しとともに掲げられた集合写真^{〔注13〕}であり、その背景に校舎とおぼしき建物が写っている。鮮明度を欠き、細部の判別が困難であるが、成人男性が10名近く写っているようにもみえる。また、背景の建物は、〔図 b〕の建物とは印象が異なり、むしろ、〔図 e〕や〔図 f〕の校舎と雰囲気が似ているようでもある。この『基督教世界』掲載

写真は、時期が分かるという点でここに注記しておく。

〔1－8〕校地購入

次に、先に引用した寄附金リストに関連して、校地購入に充てる資金が高木貞衛によって提供されたことにふれた。この土地の話はどうなったかについてふれよう。

高木の寄附金による土地購入の件は、「崇貞学校報告」中の「事務報告」に、次のように記載されている。

◎今年、三月大阪高木貞衛氏の寄附に依つて、千五百円円で約三千坪の土地を買入れました。神戸田村新吉、東京森村豊明会より、五千円づつの寄附を得ましたから、来春早々、校舎建築に取り懸る筈であります。実は今年中に、開工する筈でありましたが、愈々開工といふ間に支那官憲との接洽意の如く進まず、残念乍ら、止むを得ず、一年間延期致しました。

ここから分かることは、土地約3000坪の購入が1922年3月、22年中に予定していた校舎建築着工が繰り延べになった、という点である。

この点で、李紅衛『清水安三と北京崇貞学園』所収の「崇貞学園略年表^(注14)」の該当箇所には疑問がある。この年表では、1922年9月の項に、

神戸の田村新吉、大阪の高木貞衛、東京の森村開作男よりそれぞれ五〇〇〇円の募金を得て新校舎(一九〇〇坪)を建築。設計は近江兄弟社ヴォーリズ設計会社の村田、佐藤両技師。とあるが、高木貞衛からの寄附金額はともかくとして、「崇貞学校報告」で1922年には校舎建築工事ができなかつたと書かれている以上、李年表のこの項は誤りという以外にないのではなからうか^(注15)。

ところで、校地購入については、『朝陽門外』『北京清譚』には、取り立てての記述は見当たらないが、『支那人の魂を掴む』の「日誌」には出てくる。購入にまつわる部分を抜粋してみよう。

六月三十日 水曜

この間裡^{うち}から、学校の敷地を索めんとて、朝陽門外をぶらぶら歩きまはつてみたが、漸く手頃ものが見つかった。胡家菜園と呼ばれる八畝ばかりの畑である。

七月四日 日曜

胡家菜園を買ひ入れるには、どうしても一千五百円を要する。思ひ切つて、大阪の高木貞衛さんに、歎願状を出した。

七月八日 木曜

大阪の高木貞衛さんから、電報来る。「キミガ ナガクヤルナラ トチナルベク ヒロクカヘ タカギ」

とあつた。電報を懐にして、直に芳草地の胡家菜園に至る。涙滂沱として下だる。明日にも誰かにお金を借りて買入れることにしやう。

七月九日 金曜

胡家菜園の持主は胡延平という六十搦みの老頭児であつた。

とあり、この九日に購入できた、という経過が書かれている。ここだけ読めば何も不自然ではないように思われるけれども、「崇貞学校報告」の記述をくり返し引用すると、「今年、すなわち1922年3月、「大阪高木貞衛氏の寄附に依つて、千五百円で約三千坪の土地を買入れました。」という記述との整合性はどうなるのか。すなわち、土地購入の日時が

(A)「崇貞学校報告」(1922年9月) 1922年3月

(B)『支那人の魂を掴む』(1943年刊)所収「日誌」 1920年7月

と、両者が食い違っているからである。

私自身は（A）が事実になっっているという判断に傾く。（そのように判断する理由を書く
とあまりに細部にわたるので、ここでは書かない。）しかし、（A）を妥当だとすると、（B）を
どうみるのかという問題が残り、「お手上げ」の状態である。まさかとかは思うが、『支那人の魂』
所収の「日誌」は、フィクションを含んでいるのではないかと考えたくなる。

あれこれ推測を並べても仕方がないので、「学園史年表」には、

1922年3月 校地購入（「崇貞学校報告」による）

とでもしておくしかない判断した。ただし、「崇貞学校報告」には、購入した土地の場所の
記載はない。それに対し、「日誌」では、七月八日条に「芳草地」という名前がみえ、この地
名こそは崇貞学園所在地となったところである。だから、購入時期の件はともかく、所在地の
記述は事実だと判断できるであろう。

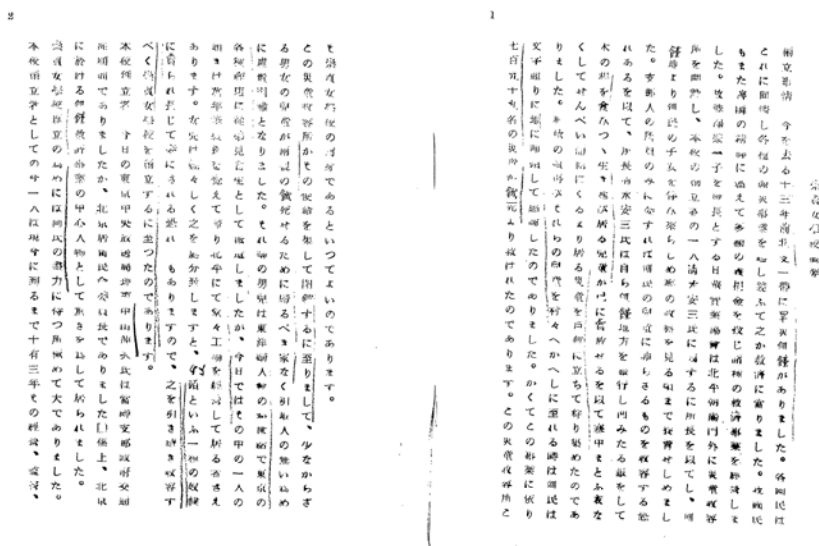
第二章

以下では、【2】崇貞女学校概要に即して考えていこう。

〔2-1〕神路街校舎の使用期間

では、崇貞学校の所在地がこの神路街であったのはいつまでか。その手がかりになる記述が『朝
陽門外』にある。崇貞学校は「その家屋を借りて、初め十年間、崇貞学園を経営したのであつた。」
（118ページ）というのである。この点は、「崇貞女学校概要」にも書かれているが、この「概要」
の発行時期が明記されていないので、それを確認しておきたい。

この「崇貞女学校概要」であるが、アジ歴資料（レファレンスコード：B05015856100）には、2
種類の「崇貞女学校概要」が含まれている。写真なしの概要〔図c〕と写真入りの概要〔図d〕である。



〔図c〕「崇貞女学校概要」の冒頭

まず、「崇貞女学校概要（写真入り）」であるが、その本文中に、

昭和五年五月

創立十周年記念会を開催せるに、遂に許可されて先づ記念館を一棟建設することが能き
た。その上棟式は昭和五年八月十九日に行はれたるが、〔中略〕

続いて新校舎が二棟、記念館と共に合せて三棟立ちました。〔ゴチ、原文。以下同じ〕
と書かれていて、「新築十周年記念館」の写真が掲載されている（ただし、〔図d〕に写って
いる建物は、この「十周年記念館」とは別である^{〔注16〕}）から、昭和五年（1930年）八月からさ

ほど時間が経過していない時期の発行と考えられる。また、

昭和六年春三月には新たに

秦賓氏帰国して崇貞女学校の経営に当ることになっています。同氏は十年前同志社に來り、中学、予科を卒へ、同大学の神学科を卒業して北平に赴任しその生涯を捧げて、崇貞女学校を充実せしめ更らに之れを大学にまで育て上ぐる決意を持つて居られます。

とあり、秦賓の肖像写真が掲載され、「新聘主任者 秦賓氏」と紹介されているので、1931年3月以前の発行と判断できる。

崇貞女學校概要
中華民國北平朝陽門外神路街
崇貞女學校



〔図d〕「崇貞女学校概要」

それに対し、「崇貞女学校概要（写真なし）」版では、同じ秦賓について、「秦賓（京都同志社大学卒業、文学士）〔中略〕の教員有し居ります。〔中略〕校舎を三棟所有して居ります」と書かれており、「写真あり版」の方が「写真なし版」よりも先に発行されていたと判断できよう。（ただし、秦は数年で崇貞女学校を辞したようである。）

いずれにせよ、1931年春に、崇貞学校は新校舎を建築し、そこに移転したと考えられる。「崇貞女学校」という学校名も『基督教世界』1924年の号にみえるから、校舎の移転とともに使用されるようになったとはいえないが、学校概要を「崇貞女学校概要」としたということは、この名称が中心になったものと思われる。移転が何月だったのかの資料を私は眼にしていないが、参考までに先に引いた李紅衛の校史年表では、31年4月に移転と記載されていることを書いておく。

以上を要するに、崇貞女学校は、1921年秋から1931年春までのほぼ10年、朝陽門外・神路街に存在し、その時期には4棟の建物を使用していた。そして、校舎の増築や新築がなされた形跡はない。

1922年、清水は高木貞衛の寄附によって土地を購入したが、その土地はどうなったのか。先に引用した「崇貞学校報告」に、校舎を建築しようとしたが「支那官憲」の許可が出ず、「残念乍ら、止むを得ず、一年間延期致しました。」とあった。この「延期」状態が10年ほど継続したと考えられる。つまり、高木の寄附金によって購入していた土地は、いわば「塩漬け」になっていた。それが中国人知人の世話でようやく建築可能になったという次第である。（この「世話」

についての説明は省略。)

〔2-2〕日本政府から見た崇貞女学校の位置

この「崇貞女学校概要」は、先に書いたように、アジ歴資料に「昭和七年十一月崇貞女学校助成金交付ニ関スル件」として保存されている。つまり、助成金申請の添付資料である。では、この資料のいわば「本体」たる文書はどういうものか。

それは、昭和7年11月17日付けで在中華民國日本公使館の大使館参事官矢野眞から外務大臣伯爵内田康哉宛の「崇貞女学校補助金ニ関スル件」である。ここでは、二段落から成るこの文章の後半部分を引用しよう。

曩ニ北京同学会語学校日語班拡張助成費トシテ金壹千円也補助ヲ仰ケル次第ナル処崇貞女学校ハ中国子女ニ対スル日本語普及機関ニシテ同学会語学校ノ主トシテ男生ニ対スルト趣ヲ異ニシ居リ是ニ対スル補助ハ頗ル有意義ト認メラルルニ付此際出来得レハ右全額若シ全額補助不可能ナルニ於テハ半額ノ六百円也補助方特ニ御詮議ノ上何分ノ儀御回示相煩度此段稟請ス

つまり、「北京同学会語学校日語班」は、北京において、主として中国人男性に日本語教育を行っているが、崇貞女学校は中国人女性に対して日本語教育を行っており、それは「頗ル有意義」だから、外務省として助成金を交付すべきだということのである。

この時期は、1931年9月18日の柳条湖事件（「満州事変」の発端）からまもない時点であって、政権側はこういう位置づけで「補助金」を考えていたのである。

〔2-3〕生徒たち、刺繍

この「崇貞女学校概要（写真入り）」を読むと、現在ではやや想像しにくい印象をいだくところがある。まず、その生徒数である。

現在では丁度百名の生徒が居ります。卒業生は百十二名出しました。途中退学者を入れば即ち五百有余名のものをして文盲を免れしめたことになります。

というのであるが、この「報告」が印刷されたのはおそらく1931年春先であるから、開学して以来約10年が経過している。卒業生112名、退学者を含めれば500名余りということであろうか。10年間で500名余りが学んだとすれば、1年平均で50名の入学者があったことになる。また、卒業生の数は平均すれば1年で11名ほどとなる。ということは、8割ほどの生徒が中途退学してしまったという計算になり、現在の感覚からすれば、異常のようにもみえる。しかし、就学期間が3年であり、学校所在地が貧民街であったことを考慮する必要があるし、加えて、この時期は中国国民党による「北伐」の時期であるし、29年には世界大恐慌があり、その余波は中国にも及んだであろう。日本国内でも、金融恐慌のおおりで、東北地方などを中心に、「欠食児童」とか娘の「身売り話」の話題に事欠かない時代であった。

崇貞女学校の生徒数についても、そういう時代状況を勘案する必要があるだろう。

また、生徒数の拡大はなされていないが、「校舎」サイズが変化しないということを前提にすれば、拡大がなされないのは自然であろう。

次に、「エムプロイドリー」についてふれよう。「崇貞女学校概要（写真入り）」では、1930年の10周年記念館、2棟の新校舎の建設に言及したあと、次のように続く。

所がここに

新たなる問題は校舎が建つともう学校の資金が乏しくなることであります。然るに何といふ神の恵みか、この校舎建築の奔走中に、エムプロイドリーの製作を始めたことであり

ます。支那の娘達は刺繍が出来ぬものはお嫁に行けぬといふ位ですから皆上手です。其処で新築の十週年記念館を工場として、在學生及び卒業生を集めて、クツシヨン、ビュロウ掛け、チイセット、タオル、ピアノ覆ひ等の製作を始めました。それが多くの同情者達に購はれまして、八月より十二月までに千五百弗の純益を得ました。このエンブロイドリイを内地、満鮮、布哇に売出しまして、学校の資金を得ることは決して不可能ではないことを体験し得まして、喜んでゐます。この

エムブロイドリー製作事業に従事せるものは、昭和五年同志社女学校を卒業せる劉貴蘭、馬淑平の両女史であつて、彼女等は東京の石川武美^(注17)、大阪の高木貞衛両氏より学費を受けて、日本に留学せる本校創立当初よりの生徒であります。日本留学中は清水夫妻と共に起臥を共にせるものなれば、清水安三氏にとりては子飼ひの教員であります。

この部分からうかがえる注目すべきところを指摘すれば、以下のようである。

1. 崇貞学校の生徒たちに刺繍を教えるということは、学校創設の時期からなされていたと思われるが、この時点になると、その商品化がはかられたということ。
2. 新築の十週年記念館がその「工場」として使用されていたということ^(注18)。
3. 刺繍製品が校費の重要な構成部分となったこと。
4. 校内での刺繍製作を中心的に担ったのが、崇貞学校初期の生徒2名だったこと。彼女らは、日本に留学し、北京に戻って崇貞女学校の教員となって、刺繍の製作・指導にあたったこと。崇貞女学校の生徒の中から日本に留学するというケースは、1930年代後半には顕著になるが、この留学は、崇貞学校初期からなされていたことが確認できる。

〔2-4〕校舎の写真

桜美林学園では、崇貞学園時代を回顧するパンフレットの類を、周年行事などに際して時折刊行してきた。その際、崇貞学園時代の写真は、撮影時期が判然としないものが多く、「1930年代の写真」とか、「崇貞学園初期の写真」といった「説明」が付けられたことが少なくなかった。だが、「崇貞女学校概要」にいくつかの校舎の写真が掲載されているので、1930年に建設された建物の姿の一端が分かるようになった。したがって、この「概要」に出ていない崇貞女学校・崇貞学園の建築が含まれた写真なら、それは1930年代後半以降のものだと（これでも大まかな年代しか分からないが）判別できることになる。

この「崇貞女学校概要」掲載写真は、インターネット上で見ることができるので、ここでは掲げないことにする。

1930年代はじめの写真であることが分かる写真が他にもあるので、その点についてここでふれておきたい。それは、*The Omi Mustard-Seed* June-July, 1931という近江兄弟社が刊行していた英文雑誌に掲載された写真である。そこには、次のような箇所がある。

Saturday before Easter gave up another thrill of unusual experience. On this day was installed Mr. Chin as principal of the Chuenchen School, started by our old Omi boy (Y. Shimidzu) for Chinese girls. Because this is the only school for girls outside the Peiping walls serving a community of nearly 70,000, and is the first Christian mission work for Chinese conducted by a Japanese, and is seeking self-support by its own industry after the manner of its parent, the Omi Mission, —this work is beginning to attract especial attention. (p.29)

ここを見ると、イースター前の土曜日とある。1931年の復活祭は4月5日だったから、この

写真〔図 e〕は、4月4日に撮影されたものと推定される。

この写真で注目したい点は二つ。第一は写っている人物、第二は建物である。

まず人物だが、最後列の右の方、一番背の高い眼鏡を掛けているのが近江兄弟社の吉田悦蔵、吉田の左の方へ、安三、男性、ヴォーリズであるが、この男性が「昭和六年春三月には新たに秦賓氏帰国して崇貞女学校の経営に当る」予定とされた秦賓（Mr. Chin as principal of the Chuenchen School〔崇貞学校〕）ではなかろうか。かれは、同年3月に同志社を卒業して崇貞女学校に「主任」として赴任したのであるから、清水とヴォーリズの中に位置していても違和感がない。なお、吉田の右隣の帽子をかぶった女性が美穂であろうし、その右隣は教員の羅俊英かもしれない。

次に建物だが、この建築物は、これまで述べてきたように、1930年あるいは31年竣工の校舎と考えることができる。

Mustard-Seed の同じ号には、この他に2枚の建物の写真が掲載されているので、そのうちの1枚を〔図 f〕として掲げる。これらの写真を参考にすれば、崇貞学園の校舎などの建築時期が「崇貞学園時代」といった漠然としたことでなく把握できる可能性が高まると思われる。ちなみに、『朝陽門外』巻頭グラビアに、「思ひ出深き旧校舎の一部」という写真が掲載されているが、それは〔図 f〕のこの建物、あるいはこれと同時期の建物だと思われる。



Pupils and faculty of Mr. Shimizu's School for Chinese Girls, outside East Gate, Peiping, China

〔図 e〕
ヴォーリズなどを迎えて。
1931年4月はじめ



First unit of new buildings for Mr. Shimizu's School for Chinese Girls
in Peiping

〔図 f〕

〔2-5〕近江兄弟社

〔図e〕に戻り、なぜここに近江兄弟社のヴォーリズと吉田悦蔵がいるのかということにふれる。当時近江兄弟社は、朝鮮から中国にかけて、その製品の販路開拓・拡大をめざして、そのための調査旅行というのが、このときの吉田たちの旅行の主要目的であった。当時の清水は同志社大学講師であって、大学の仕事が一段落したところで、吉田たちに同行して、朝鮮を経由して、4月1日に北京に到着したのだった。

ヴォーリズと清水が出会ったのは、1905年である（この出会いを1906年とする年表もあるが、それは誤り）。ヴォーリズと清水の関係は、じつに長いが、その点についてはここでは割愛し、近江兄弟社と清水の関係について、少しふれておく。ここに掲げた写真の時期から10年近く後のことだが、『湖畔の聲』1939年5月号の「近況録」に、こうある。

◎『姑娘の父母』、『朝陽門外』の二著と、陽春の一新聞雑誌界に、『北京の聖者』として、今年初頭のジャーナリズムのトップに踊る人、清水安三兄と、近況子は三月十七日京都放送局に一室にて『さよなら』をして、彼は、一路北京さしてかへり行きました。

◎近江兄弟社とメンソレータム本舗が、過去に清水兄を一生懸命に支持して来た甲斐あつて、今日は何んだかメンソレータムの無料宣伝の様になつて了ひ、若し此頃の『清水兄とメンソレータムの話』が、新聞雑誌、そしてやがて映画と舞台に出ることを金に換算すれば、数千万円に当るかもしれません。全くメンソレータムに取りては、天祐であり、思はぬ天来の利であつたと言ふべきでしょう。（傍点は引用者）

ここに、傍点を付したところからうかがえるように、第一に、1939年のはじめ、清水は有名人間になっていたし、その活動は劇化もされた^(註19)。第二に、「近江兄弟社とメンソレータム本舗」は、清水をおおいに支援したというのである。

清水の住居も、北京（当時は「北平」）の住居も、近江兄弟社の所持する建物（旧・李鴻章邸）の一角にあった時期もあり、また、給料に相当する金額を近江兄弟社側が負担していたという。

この関係は、『朝陽門外』にも、明瞭に記されている。年は明記されていないが、推定するに1933年3月、

同志社総長に呼びつけられて鹹になつたのであつた。〔中略〕

かくしてわたくしはすつかりあぶれてしまつたのであるが、幸ひにして翌日近江兄弟社メンソレータム会社に拾はれて、北京に遣はされることになつた。わたくしが北京に帰つたと知つて、朝陽門外の姑娘は鬨の声をあげた。〔中略〕

内地に来てゐればこそメンソレータムの吉田悦蔵君と近づくことを得、友情を新たにし得たのである。〔中略〕

それ以来今日までわたくしはメンソレータムを売りつつ、崇貞学園をやつてゐるのである。メンソレータムも来た頃は月にたつた十二円しか売れなかつたが、今では五名の店員を使ひ、天津、上海、青島、済南にエゼントを与へられ、一ヶ月一万円、時には二万円も売れるやうになつた。そして、わたくしは、メンソレータムでおまんまを頂き、誰に憚ることもなく面白く支那の姑娘達を育てることができるのである。（173-4ページ）

ここをみれば、清水と近江兄弟社の深い関係が如実にわかる。この関係は、『湖畔の聲』掲載の彙報欄などによって、年代記的にも明らかになるだろう。ここでは、その指摘だけにとどめておく。

ただし、アジ歴資料にうかがえる1930年代半ば以降の学校会計報告の類いには、近江兄弟社関係からの収入のことがあまり出てこないような印象を受ける。それが問題だ、ということではまったくないけれども、アジ歴資料や『支那之友』資料だけを追いかけても、たとえば校舎

建築費用などの実態には迫れないのではないかと漠然とを感じるが、ここでは、立ち入らないことにする。

〔2-6〕校名について

ここまで読まれた読者のなかには、「崇貞学校」とか「崇貞女学校」という名称に違和感を覚えるかたがおいでもしれない。それは「崇貞学園」ではないか、と。

それはある意味ではもっともである。というのも、その創設者清水安三の『朝陽門外』（1939年）をみれば、その「第二部 崇貞物語」に「崇貞学園生」という表題があり、学校名は当初から「崇貞学園」であったかのように書かれているからである。しかし、これまでみてきたように、「崇貞学校報告」とか、「崇貞女学校概要」という文書が存在するのであり、それらの文書に「崇貞学園」という文字が出てこないことも他方の事実である^(注20)。

しかし、そういう「報告」や「概要」は、外交史料館とかアジア歴史資料センター資料に残るものであって、アジア資料に関してはインターネットを介してのアクセスが可能になったとはいえ、手軽にアクセスできるともいいがたい。そこで、『朝陽門外』などの著作でまず清水の人となりや活動を認識したひとは、熱心に読んだひとほど、『朝陽門外』の記述をまず想起する、というようになりがちである。

加えて、『朝陽門外』は、刊行当時ベストセラー^(注21)になったものであって、その一因に印象深い書きぶりがあったとはいえるであろうから、そこに、「忘れもしない…」などと出ていると、まるでそれが事実であったように思われるのも無理からぬところである。

単純な一例をあげると、清水は、なぜ中国に渡ろうとしたか、そのきっかけをつくったものとして、徳富蘇峰の『支那漫遊記』を読んだことをあげている（58ページ以下）。しかし、蘇峰の『支那漫遊記』の刊行は1918年であり、清水が中国に渡ったのは1917年である。したがって、清水が中国に「捉えられる」ことになったきっかけ（のひとつ）に蘇峰のことばがあったとしても、それが『支那漫遊記』であったということとはあり得ない話である。この種の記憶違いはだれにでも起こり得るであろうから、「批判」してもはじまらないかもしれないが、この種の記憶違いが『朝陽門外』だけでなく、清水の著作に散見される。（なお、蘇峰の著作点数は膨大である。）

この種の「史料批判」は、歴史学徒のイロハであるが、このことをくり返さざるを得ない状況がある。

ついでにいえば、少なくとも『朝陽門外』については、もし「復刊」するのであれば、ここに例示したような「史料批判」を含む注記を付した版とすべきであると考ええる。（清水の他の著作についても、同様に述べるべきことはあるが、ここでは割愛する。）

校名についてといいながら、話が脇道に逸れた。「崇貞学園」という名称がいつ登場するかについては、後にふれるとして、ここではもうひとつの学校名ともいべき「工読学校」という名称について検討しておきたい。

それは、清水が『朝陽門外』で、「創立当時、崇貞学園を**崇貞工読女学校**と呼んでゐた。工読といふは耕読からもぢられたものであつて、工^{しか}し而して読むとふ意味である。」（150ページ）と書いているものである。〔ゴチは引用者。以下、「工読」を含む学校名のゴチも引用者〕

まず、この名称であるが、冒頭に掲げた次の資料を検討してみよう。

【1】崇貞学校報告〔1922年9月〕

【2】崇貞女学校概要〔2種類。いずれも1931年頃発行と推定〕

【3】崇貞女学校概要〔1935年末頃の印刷と推定〕

【4】崇貞学園一覧〔1936年10月発行〕

すると、ふしぎなことに、「工読」という文字は、【1】から【3】にはどこにも出てこず、【4】に至ってはじめて現れる。(ついでにいえば、「崇貞学園」という名称も、【4】ではじめて現れる。)ただ、【3】の「概要」には、「アルバイトシユレ」という見出し(アルバイトは労働、シユレは学校の意。Arbeitsschule)があり、生徒の「自活」をうながすように刺繍の指導をしているという説明があつて、実質的には「工読」ともいえるけれども、このことば自体が出ているわけではない。

工読ということばは『崇貞学園一覧』に出てくるのではあるが、『朝陽門外』での呼称と同一とはいえない。というのは、『崇貞学園一覧』収録の「崇貞学園小史」(中国文・(清水誌)と文末に記載)中に「**工読学校**」とあることはあるが、「工読」の上に「崇貞」とか「女」とかは付いていないからである。また、同じ『崇貞学園一覧』収録の「校名と校歌」(清水郁子)冒頭で、郁子は次のように書いている。

崇貞工読学校といふ名は何だか古くさい感がするので、此度作つた校門には崇貞学園と金字を彫り出した、が、創立当時には、学堂といふのが普通で、崇貞工読学校といふ名さへが、尖端的で最新式の呼名であつたといふ事である。

つまり、『朝陽門外』の「崇貞工読女学校」と同一名称ではない。

なお、ここで、「此度作つた」の「此度」というのは、郁子が崇貞女学校の経営に加わつた1935年夏前後から『崇貞学園一覧』刊行までの間と読むのが自然であろう。

清水美穂伝である松本恵子『大陸の聖女』(1940年)は、安三にインタビューを重ねて成つた本であるが、この本では、学校名は単に「**工読学校**」(192ページ)である。また、この本(291-2ページ)では、「昭和五年初夏〔中略〕十年間風雨に曝されてゐた『工読学校』の看板が外されて、それに替る『崇貞女学校』といふ墨痕鮮かな文字が、〔中略〕正門を飾つてゐた^(注22)」と書かれている。

松本の記述も郁子の記述も正しいとすれば、看板の掛け替えが1930年と1935年あるいは36年の二回あつたことになるが、それはさておこう。

時期の問題はともかく、郁子は「崇貞工読学校」と書き、松本恵子は「工読学校」と述べ、『朝陽門外』は「崇貞工読女学校」としているから、「工読」を看板にしていたことはたしかであろう。そしてそれは、学校名としては看板に掲げられなくなったかのようである。

とはいえ、工読学校という発想は、清水がデューイやペスタロッチ、ジャン＝フレデリック・オーベルランの思想に学んだものであるから、学校の基本性格を考える上では重要な理念といふべきである。また、郁子の証言通り、「工読学校」という看板が校門に掲げられなくなつていたとしても、校内では刺繍など「工」の教育は続いていたことも、他方の事実である(刺繍が校内で重視されていた点については、すでに〔2-3〕で述べた)。『大陸の聖女』巻頭のグラビアに、清水美穂の写像があるが、そのキャプションに、「清水美穂子の墓(背後は「刺繍の家)）」とあつて、旧校舎が「刺繍の家」に転用されていたことがわかる。

また、【3】「崇貞女学校概要」では、「崇貞女学校の特長」として、「工読教育、社会奉仕、家族主義の三つ」をあげていて、「工読」の意義を強調している。

「工読学校」の呼称にヴァリエティがあると書いてきたが、ことはそれだけにとどまらない。清水の『北京清譚』(教育出版、1975年、132ページ以下)では、「**崇貞女子工読学校**」と書かれているからである^(注23)。

いずれにせよ、「崇貞工読学校」「工読学校」「崇貞工読女学校」「崇貞女子工読学校」のいづ

れが正式の名称であったのか、さらなる検討が必要である。

なお、「崇貞学園」という名称は、『崇貞学園一覧』に出ていて、先に引用した郁子のことばからすれば、1936年から使われるようになったもののように見える。ここでは典拠などを詳しくは述べないが、清水が日本の外務省に補助金申請をする際に使用した名称は、1939年3月までは「崇貞学園」ではなく「崇貞女学校」であったのであり、それに半年ほど先だって名称変更の届が出されていた。外務省への届出による名称を最重要と主張するつもりもないが、文書からみた事実のみを記しておく。

この後、1936年以降になると、学校規模の拡大が顕著になっていく。この稿の執筆前には1940年あたりまで書くつもりであったが、論文の枚数がふくらんでしまったこともあり、その時期の「学校史」については、機会があれば、論じることとしたい。

(未完)

(注1) 清水安三『朝陽門外』朝日新聞社、1939年。

(注2) アジア歴史資料センター資料・レファレンスコード B05015394200。これは、外務省外交史料館の資料である。崇貞学校は、その所在地が北京だったから、文部省ではなく外務省の所管となっていた。資料の表題は「在北京支那崇貞学校補助方ノ件」であり、東北大学教授・工学博士佐藤貞吉が崇貞学校への補助金申請をした際に参考資料として添付した「崇貞学校報告」が保存されていた、という経緯である。

この時点で、実際に補助金が交付されたかどうかは判然としないが、学校存続のために補助金の給付を受けるという事態は、学校設立後の初期から存在していた。

(注3) アジ歴・レファレンスコード B05015856100

(注4) 東京大学東洋文化研究所図書室所蔵。なお、この「崇貞学園一覧」の「復刻版」のようなもの(2014年刊)が桜美林大学図書館に所蔵されている。しかし、これは原資料とはページの順番を変更したものと書かれている。そこで、この2014年版を原資料と比較してみると、英文部分6ページのうち2ページがなぜか欠落している(しかもその欠落部分には、この一覧の「奥付」が含まれる)という具合である。ただ、2014年版では、この「一覧」が崇貞学園の学園史というべき『支那之友』の「特別号」であることが記されていて、東文研の原資料ではその点の確認が至難なので、その点だけは貴重といえば貴重である。

(注5) 『北京清譚』教育出版、1975年、135ページ。

(注6) 清水「北京通信」(『基督教世界』1921年3月31日)には、清水の旱災救援活動が1月に始まると書かれている。この記事は、私の『清水安三と中国』(120ページ以下)でも引用し説明したからここでは立ち入らないが、『基督教世界』は清水の属する組合教会の機関紙であり、「北京通信」という題名からしても、自分の最新の動静を組合教会の人びとに伝えようとする「通信」であることは当然ではないか。この記事と時期的に矛盾する言説、すなわち、清水の華北旱災救援活動が1921年初頭から始まるとしない言説は誤りという以外にないという点を改めて強調したい。

(注7) 清水『支那人の魂を掴む』創造社、1943年。

(注8) ただし、この「崇貞女学校概要」では、「清水安三氏は組合教会の支那伝道有志者の後援が絶え、止むなく昭和四年より日本に帰り」、『基督教世界』の「編輯主任となり、或時は同志社講師として」と書かれている。この「昭和四年」=1929年より、というのは、『基督教世界』の彙報欄の記事などからして、1927年よりの誤りである。ことほどさように、

清水に関する年月の記述にはあてにならないものが少なくないが、特定の資料だけを見て、それを事実のように書きなぐる人がいるのも、「伝言ゲーム」に付き合わされている趣で、困った話である。

- (注9) 『国民新聞』(1921年1月14日付)には、「北支那飢民救恤義捐芳名第七回報告」が日華実業協会の名前で出ており、個人・団体・企業などの名前が列挙され、累計52万4千円を超える金額が集まったと記されている。同紙1月22日付には、「第十回報告」が掲載されている。これだけの救援運動であるから、北京を含む華北で救援活動にたずさわった人も多かったのは当然であり、そのひとりに清水がいたのだった。

52万円というのは貨幣価値を想像しにくい、参考までに、賀川豊彦『死線を越えて』(1920年、550余ページ)の価格が3円であったとだけ書いておく。大正期の「円本」以前である。

- (注10) この太平倉の位置については、太田『清水安三と中国』(花伝社、2011年)の表紙カバーに掲げた地図で明瞭に確認できる。このカバーにその一部を使用した地図「新測北京内外城全図」は、清水とも交流があった丸山幸一郎の『北京』(大阪屋号書店、1923年)の付録(財団法人東洋文庫所蔵)である。

- (注11) 中山の伝記である松岡譲編『中山龍次』(中山龍次先生顕彰会、1958年)には、崇貞学園の創設者が中山であるかのような記述があるが、中山の心理状態からすれば、そういう認識になっても自然だったのかもしれない。

- (注12) 『北支在留邦人芳名録』(1936年刊。国立国会図書館デジタルコレクション)によれば、伊東は1885年生まれ、北京で歯科医師をしていた。北平日本居留民会常務委員・帝国在郷軍人会北平分会評議員。この『芳名録』には、矢野の名前は出てこないが、『朝陽門外』には、「三菱の矢野春隆」という記述がある。

ちなみに、『魯迅日記』(1923年)には、歯科医師としての伊東の名前が10回以上登場する。

- (注13) 太田『清水安三と中国』(前掲)の巻頭に掲載。

- (注14) 李紅衛『清水安三と北京崇貞学園』不二出版、2009年。

- (注15) この点は、後に出てくる(注20)の『葦の匂ひ』の引用文も参照されたい。

- (注16) [図d]の写真の中ほどに美穂が写っていて、その隣りに幼児がいる。安三・美穂の娘・星から聞いたところでは、この幼児は長男の泰だと、樽松かほる名誉教授から教示いただいた。泰だとすれば、この写真は、1920年代中頃の、清水夫妻のアメリカ留学直前あるいは直後の写真で、直前にせよ直後にせよ、1920年代の写真であり、背後に写っている校舎も、1920年代に使用されていた神路街の校舎であることになる。

- (注17) 石川武美は、『主婦之友』の創業者として知られる。崇貞女学校への支援者のひとりであった。

- (注18) 「清水美穂子伝」という副題をもつ松本恵子『大陸の聖女』(鄰友社、1940年)巻頭のグラフィック参照。後述(36ページ)。

- (注19) 『朝陽門外』の劇化については、太田「清水安三・郁子の結婚と『朝陽門外』の劇化」『清水安三・郁子研究』第9号(2017年3月)所収、参照。この論考は、『光』第1156号(一燈園出版部、2017年8月)に転載された。のち、太田『続・清水安三と中国 その人的ネットワークと学校』(私家版、2018年)に収録。

- (注20) 崇貞学園の熱心な支援者たちの文章を少しみておこう。

・相賀安太郎『鮮満支の初旅 葦の匂ひ』(日布時事社、1925年)に、「崇貞女学校は清水氏の経営に成るもの、一九二一年五月の創立故、すでに満三年を経過してゐる。今は新

に聘せられし侯女士と共に四人の支那人女教師が教鞭を執り、六十余名の支那人少女が通学してゐる。〔中略〕私と清水夫人とは崇貞女学校を出てから、直きその傍に在る将来の同校建築敷地を一見した。敷地は千七百余坪〕(262-4ページ。傍点引用者)とある。

相賀はハワイの新聞『日布時事』を経営するジャーナリストであり、1924年、清水夫妻がアメリカ留学に出発する少し前に北京を訪問し、清水夫妻に会っていた。その見聞が正確に書かかれているものと判断したい。

短い引用だが、情報が豊富に詰まっている。学校名は「崇貞女学校」としか書かれていないし、「工読学校」という名称も登場しない。創立年月はもとより、教員数・生徒数も、この通りだったのだろう。また、当時の学校所在地の近くに「将来の」「建築敷地」1700余坪を所有していたとあり、これは高木貞衛の寄附金で購入したものであろうし、この時点では、その地に校舎は存在しなかったと読むべきであろう。

・『神の国新聞』は賀川豊彦の主宰していたものだが、その1936年3月4日発行紙に「北平の崇貞女学校 輝く我が女性の偉業」という記事がある。副題の暗示するように、美穂のことを書いているが、記事中にも、学校名はこの記事の題名にもなっている「崇貞女学校」という名前があるだけである。

- (注21) 近江八幡市立図書館所蔵『朝陽門外』の奥付をみると、「昭和十四年四月二十日発行 昭和十四年四月三十日廿九〔29〕版発行」とあり、驚くべき売れ行きであったことがわかる。太田雅夫「清水安三と沢崎堅造」(『朝日ジャーナル』1972年6月30日)によれば、「『朝陽門外』は、朝日新聞社より出版され、七万部が売れるというベストセラーとなり、一〇万円の印税で校舎二棟が建設されるという状態であった」という。

たしかに、『朝陽門外』はベストセラーとなった。そこで、その印税が「校舎二棟」だったかどうかはともかく、崇貞学園校舎建設費用に回されたということは、あり得るだろう。しかし、『朝陽門外』の定価は、少なくとも販売当初においては1円30銭である。7万という数字が誤りでないとしてのことだが、7万部売れても、1.30円×7万部では10万円にも達しない。それなのに、印税が10万円とはどういう計算なのか、私には理解不能である。

- (注22) 松本恵子『大陸の聖女』前掲、291-2ページ。先に私は、崇貞学校が1931年4月に校地の移転をしたと書いた。松本の記録した1930年というのは、じつは移転時の31年のことではなかったのではないかと私は考えるが、その点はともかくとしよう。
- (注23) 李紅衛『清水安三と北京崇貞学園』(前掲)では、「崇貞平民女子工読学校」という名称を書いている(176ページ)。

(付記) 本文中の資料には、こんにちからみて差別的な表現が含まれている。しかし、その資料の執筆者に差別の意図があったわけではないこと、また、その執筆者が故人であることを考え、原文のまま引用した。

引用文中、旧仮名遣いは基本的にそのままにしてある。

漢字の旧字体は新字体に改めるようにしたが、旧字体のままにとどめている箇所もある。また、清水安三の文章には、現在の文字遣いからすると当て字とみえる字句が散見される。そのばあいには、「ママ」と付れたり〔 〕で注記したところもあるけれども、煩雑さを避けるということもあり、そのすべてについて注記してはいない。